

はじめに＝私が鈴木正博氏と考古学に出会ったとき

考古学者・鈴木正博さんとは、馬場小室山遺跡をめぐる不思議な縁に導かれての出会いだったように思います。

2004年夏、北総、特に印旛沼周辺の遺跡について佐倉市井野長割遺跡や曲輪ノ内貝塚の発掘調査など最新の知見を追って、HP「歴史に好奇心！さわらび通信」で情報発信していた頃でした。

同HPの掲示板への馬場小室山遺跡についての情報、そして9月末、HP「千葉市の遺跡を歩く会」の掲示板での「【緊急依頼】馬場小室山遺跡発掘調査ボランティア募集」という転載メールに接し、その週末の10月2日（土）に馬場小室山遺跡を訪ね、「調査終了後」の遺跡の姿を「馬場小室山遺跡からのメッセージ」と題してHPにアップしました。まだ一人で遺跡と向き合っていた頃のことです。翌週10月11日（祝）、夫が映画『草の乱』を見に浦和へ行くというので、「ついでに遺跡も見てきて」と頼んだところ、偶然にも現地で鈴木正博氏にお会いしたとのこと。その週末の16日（土）、朝から私一人で馬場小室山遺跡を訪ねていた際、重機が遺跡の巨木を伐採し根ごと引き倒して遺跡を埋め戻すという現場を目前に見ることになりました。その現地から携帯電話で自宅の夫に連絡、リアルタイムで、HP掲示板でその状況を伝え、それを読んだ高花宏行さん、杉田秀一さんたちが現地へ急行して、鈴木さんと合流。遺跡の保全へ向けた動きが新たな仲間で模索される第一歩となりました。

私と鈴木さんご夫妻との初めての出会いはそのあとの10月23日（土）。遺跡の破壊工事が大雨の後、小休止していた日でした。泥だらけになって地下から現れたばかりの土器の大破片と一緒に「救出」。その時の感想をHP掲示板に「鈴木先生には、実地でいろいろ教えていただき、考古学者の信念に触れた思いがしました。」と書いています。

かくして不思議な出会いにより、馬場小室山遺跡の保存と研究をともにする活動がスタート。鈴木さんにとって、私は考古学の世界の外から来たエイリアンのような存在だったかもしれませんが、ここ9年間の「異文化世界」との関わりの中で、馬場小室山遺跡研究の活動の場でパブリックアーケオロジー（市民による市民のための考古学）の試みが実践され、また私にとっても、実際の採集資料に触れる中で「考古学」の方法を体得する場となりました。

この考古学の手法、即ちモノ資料の新旧と推移を編年という視点で考え分析し、型式と系譜を明らかにする方法を、地域の石造物研究の分野でも試みてみました。

1. 北総の子安像塔成立にかかわる像容の特徴と編年

北総の印旛沼周辺から利根川下流域は、女人講による石造物が多い地域で、特に「子安塔」と通称される「子安観音」などを抱いた姿（子安像）の石塔が多数みられます。仏像の儀軌にはないこれらの石塔については、その定義すらあいまいで、「子安」銘の文字碑や石祠も「子安塔」と称するほか、銘文により「十九夜塔」などの月待塔に分類されていることもあり、子安像の初出とその系譜を把握するに至っていません。まずは、「子安像塔」を「観音と子どもが一組になった像をもつ石造塔」（田中 1993）の名称に準じて、「観音または女神像が子供と一体となった像容を持つ石造物」（麻 2010）と定義し、各市町村に散在しているデータの集積を始め、現在まで約千基の子安像塔をデジタルカメラで撮影、像容の特徴と銘文を確認しました。

データは、紀年銘（故人の没年をさかのぼって記す墓塔は除く）を編年の軸として画像を並べ、特に江戸時代中期（1717～1803年）約110基については像容を鮮明に把握するため、写真をトレースし、時系列で形態と像容の特徴の変化がわかるよう系譜（Fig.12）を作成しました。

その中で、子安像塔成立と変容のカギとなる主な子安像塔6パターンを抽出し、紹介します。

(1) 酒々井町柏木の二児石祠型

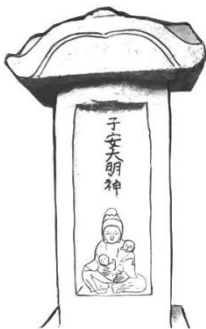
酒々井町柏木の元文5年（1740）の子安像塔（Fig.1）は、①二児を配した子安像と、②像が石祠内にあることが特徴で、①と②の両特徴をもつ事例は他に酒々井町伊篠白幡神社と佐倉市・成田市に計4基あります。（市町村名とその範囲は1991年4月当時、以下同様）

①の主尊の肩と懐に二児を配する「おんぶにだっこ」の像容は、中期で14基あり、地域的には、酒々井町から、佐倉市・本埜村を経て光背型となり、下総町・成田市に伝播し、栄町では中期～後期前葉の子安像の特徴となります。

②の石祠の特徴は、ムラの産土神社境内に子安大明神として祀られていることが多く、中期では酒々井町・成田市・佐倉市・千葉市で計8基、後期では印西市・船橋市・白井市などでもその姿が見られます。



Fig.1
元文5年(1740)酒々井町柏木



天明3年(1783)佐倉市



明和元年(1764)成田市



安永3年(1774)栄町



延享元年(1744)酒々井町

(2) 酒々井町尾上住吉神社の思惟相型

酒々井町では宝暦元年（1751）、尾上住吉神社にある右手を頬に当て左手に子を抱かせた「子安大明神」像(Fig.3)が創られました。17世紀後葉から、主に十九夜塔の主尊とされていた思惟相の如意輪観音像の変形像です。

その後、印旛村・富里市・船橋市でも造られ、江戸中期では計14基あります。これらの子安像は、同時に①の二児がいる像や、②の石祠内に子安像を刻むものも多く、酒々井町からの伝播の過程が推定できます。



Fig.3 宝暦元年(1751)
酒々井町尾上住吉神社



Fig.4 明和元年(1764)印旛村



安永5年(1776)酒々井町



宝暦12年(1762)成田市



天明3年(1783)成田市

(3) 千葉市大宮安楽寺の右向き傾斜型

安永7年（1778）千葉市大宮安楽寺子安像塔(Fig.5)は、思惟相型の系譜を引く石祠内の子安像ですが、右立ち膝の斜めのラインと上体の斜めのラインが平行し、丸みを帯びた宝髻と被布のようにも見える長い垂髪が特徴です。如意輪観音の変形像の首を立膝側に傾けた姿勢で、思惟相型では頬に当てていた右手を腹部に回して両手で子を抱き抱えています。さらに視線を子の方に向けることで、慈愛の情がより強く表現されています。

子を懐に入れ、右へ傾斜したこの姿勢の像容は、天明6年（1786）銘の千葉市且谷町例からは光背型となって千葉市市域の子安像塔の特徴となるほか、江戸後期には分布も広がり、文化年間には白井市と八千代市での各初出の子安像塔にもその特徴が継承されていきます。



Fig.5 安永7年(1778)
千葉市大宮安楽寺



Fig.6 天明6年(1786)千葉市



寛政3年(1791)千葉市



寛政11年(1799)千葉市



文化11年(1814)八千代市

(4) 印旛村岩戸西福寺の左向き型

(3)とは逆に右立膝の反対の左側に上体が傾斜した姿勢は、安永5年(1776)の印旛村の例に始まり、我孫子市・印西市・佐倉市・千葉市など各地で数点見られます。

やや不安定な姿勢のため、天明7年の印西市例の像容のように左立膝となっている事例もみられます。髪は垂髪ではなく、高く結び上げています。



安永5年(1776)印旛村



安永10年(1781)我孫子市



天明7年(1787)印西市



寛政6年(1794)佐倉市

(5) 栄町西新田の正面向き型

酒々井町で子安像塔が生まれた元文5年(1740)、利根川南岸の栄町西新田では、大日如来像のフォームを思わせる正面を向いて子を抱いた光背型の子安像塔が生み出されました。

下総町や栄町では、この正面向き像に二児が戯れる1.の(1)の特徴を引く子安像塔が現れます。

また小見川町や隣接した佐原市、神崎町では、膝に抱かれた子が蓮華を持ち、あるいは合掌するなど子の姿が多様化し、やがて後期の文化文政期の複雑な像容へと変化していくスタイルの基本となります。



Fig. 8 元文5年(1740)栄町



元文6年(1741)小見川町



安永3年(1774)小見川町



天明2年(1782)佐原市

(6) 銚子市高神東町の蓮華を持つ型

その他江戸中期では、蓮華を持つ聖観音立像の系譜をひく子安像塔が、銚子市高神東町をはじめ、東総を中心に早くから現れます。

そしてこの蓮華を持つという特徴は、同時期の如意輪観音像にも共通して江戸時代後期に増加し、近代には北総の子安像塔の主流となります。

(7) 江戸時代後期以降の様相

以上が、子安像塔が北総に出現したころの江戸時代中期の様相です。普及期の江戸時代後期前半も基本的に中期の系譜を引きますが、やがて化政文化を反映して、児が這い上がる姿を動的に表現する子安像など複雑な像容や、凝ったデザインの像があらわれます。(蔵 2011)

さらに子安像塔が女人講の供養塔として、如意輪観音像を凌駕して北総地域を席卷する江戸時代末期から近現代に至ると、数量は一気に増大し様々な像容や形態が現れます。筆者はそれらの千件近い子安像塔の画像を比較検討し、江戸時代末期は 9 型式、近代 15 型式、現代 4 型式に包含され、その分布も特徴ある様相を示すことを明らかにしました。(蔵 2012)



Fig.9 延享2年(1745)
銚子市高神東町

2. 子安像塔の系統分析による新知見

1. の分析結果を手がかりにすることにより、北総の子安像塔の初出の考証と、紀年銘不明の子安像塔と建立年代の推定を試みてみました。

なお、建立年銘と像容以外に編年の手掛かりになるのは、石質と法量、石塔の形態です。江戸期から現代までの石造物一般に共通する点で時代区分に重要な要素ですが、やや大まか過ぎ、やはり像容の微妙な変遷を追うことが不可欠と思われます。

(1) 北総における子安像塔出現のルーツは袖ヶ浦市百目木子安神社の石祠

千葉県で最古の子安像塔は、江戸初期の元禄 4 年(1691) 銘を持つ袖ヶ浦市百目木子安神社の石祠(Fig.10)で、「子安大明神」「百見(マ)木村」「戸国村」の銘が刻まれています。1981 年に袖ヶ浦町の町史編さん室が調査したメモを地元の方がお持ちでしたが、未報告の石造物です。

袖ヶ浦市は旧上総国で、旧下総国の北総とは距離があり、また北総に比べ子安像塔の建立が少なく、江戸時代中期にさかのぼる事例も少ないので、北総で展開する子安像塔との関連は薄いように思えていましたが、百目木子安神社の子安像塔は、元文 5 年(1740)酒々井町柏木の子安像塔(Fig.1)とそれに続く北総中期の子安像塔の特徴

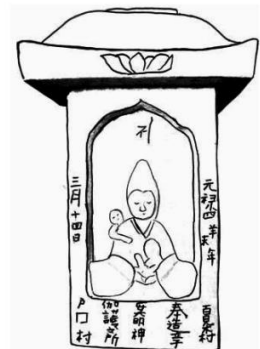


Fig.10 元禄4年(1691)
袖ヶ浦市百目木子安神社

である①二児を配した子安像であることと、②石祠内にあることが共通しており、百目木子安神社の子安像塔がそれらのルーツと考えられます。

百目木の子安神社は、地元の方からお話では「縁日には露店が出るほどにぎわった」といわれ、小字名や屋号に「子安」の名も残っています。この百目木の子安像塔の像容に関する情報が、参拝者などの伝聞などで酒々井町にも伝わり、その像容の特徴点とともに、やがて子安像塔が北総全体へと普及していったと考えられます。

(2) 「初出」と確認できなかった過去の既報告データ

既報告の子安像塔の初出に関するデータの中に、私の編年と系統図にそぐわない事例があり、現地調査を行ったところ、紀年銘の読みや像容の誤認が明らかになった事例がありました。

① 銚子市若宮町東岸寺の「元禄三年子安観音」像

この子安像塔は『千葉県石造文化財調査報告』^{註 1)}に、「元禄三年」(1690)で千葉県初出として報告されています。

実見したところ、石材が軟質の凝灰岩製で著しく風化が進み、銘は「文」の1字以外は判読不明でした。まず石質から江戸初期とは考えられず、形態と像容からも江戸時代後期の作と思われたので、千葉県中央博物館に保存されていた調査カードを見せてもらったところ、転記ミスの可能性がわかり、「文化三」または「文政三」年の建立と判明しました。

なお、「元禄三年の銚子市の子安観音」という『県報告』^{註 1)}のデータは、『千葉市文化財調査報告』^{註 2)}や『船橋市の石造文化財』^{註 3)}に、千葉県の子安観音の最古例として記述されていました。

② 我孫子市江蔵地青年館の「享保三年の十九夜塔」

我孫子市江蔵地青年館の享保三年(1718)銘十九夜塔は、『女人哀歓 - 利根川べりの女人信仰』^{註 4)}で「子安観音の原型」と記され、『房総の石仏百選』^{註 5)}でもこの塔が「(千葉)県内最古で「(子安)観音の発祥地を暗示する」と述べられ、また印西町教育委員会発行の『石との語らい』^{註 6)}でも「如意輪観音からの変容」の例として紹介されています。

しかし、江戸中期の子安像塔の分布(Fig.13)から考察すると、我孫子市での千葉県初出は考えにくく、改めて現地で見ると、この十九夜塔に浮彫りされた主尊は子安像ではなく、未敷蓮華を持つ思惟相の如意輪観音像でした。

この如意輪観音像が子安像塔と誤認され流布した元は、『我孫子市史資料 金石文篇 I 石造物』^{註 7)}に、写真入りで載っている「如意輪観音・十九夜塔」の「(如意輪観音浮彫)」の下に小さなポイントで「*赤子を抱く。」と記載されていることに由来するのではないかと考えられます。おそらく調査者が未敷蓮華についての疑問点として書いた調査カードのメモが報告書でも追記され、各著書でも実際に現物を見ないまま引用され流布されていったと考えられます。

③ 紀年銘が欠損した白井市の子安像塔建立年の推定

編年と系譜が明らかになると、紀年銘を欠く石塔の建立年が推定できます。

白井市の中木戸観音堂の子安像塔は、光背が欠損しているため、元号が不明で、紀年銘は「六巳十一月」しかわかりません。

しかし、その像容は、明らかに1.の(3)の右向き傾斜型の系統であり、類似した千葉市の寛政11年(1799)子安像と八千代市初出の文化11年(1814)の子安像(Fig.6)の中間に入ると思われました。この期間で「六巳」が当てはまるのは、文化6年(1809)です。

『白井町石造物調査報告書』註8)では、この子安像塔を「大正六年」(1917)としていますが、文化6年(1809)建立と訂正することにより、この塔は白井市初出の子安像塔ということになります。

そして子安像塔が千葉市～八千代市・白井市と各市域の初出として伝播する過程は、江戸湾～花見川～新川～印旛沼という古くからの水運のルートを進ることになり、江戸時代後期の文物の交流ルートの一例としても評価できます。

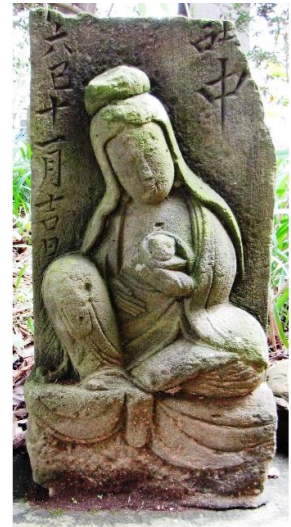


Fig.11 文化6年(1809) 白井市中木戸

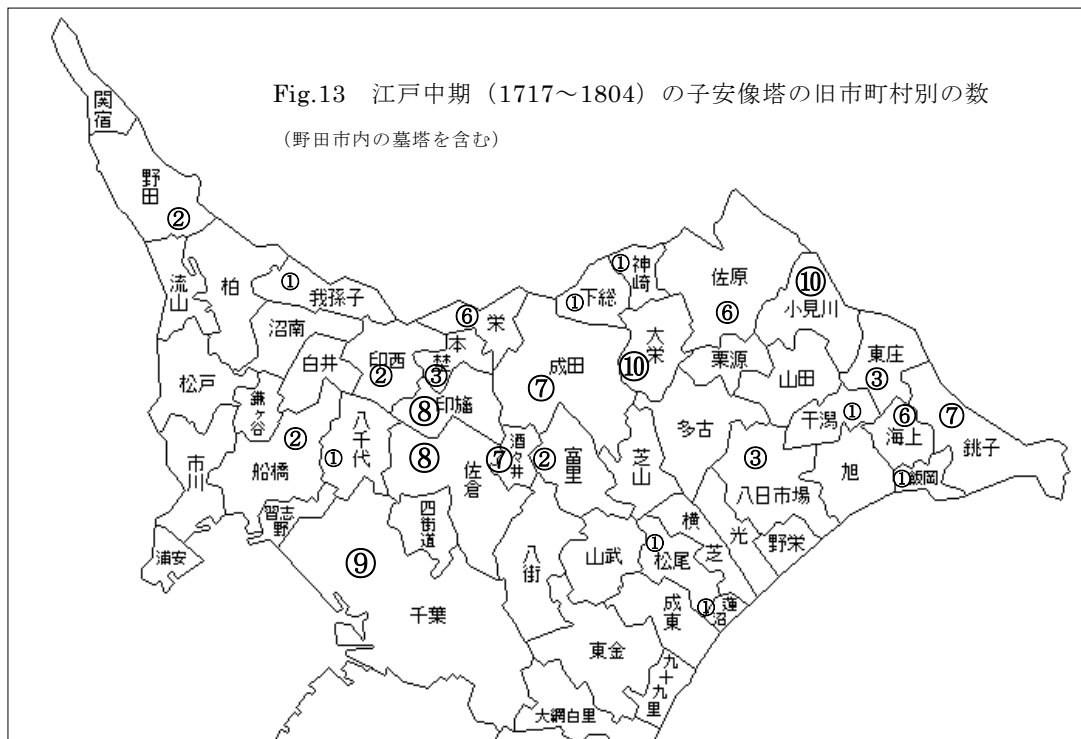


Fig.13 江戸中期(1717～1804)の子安像塔の旧市町村別の数 (野田市内の墓塔を含む)

Fig. 12-1

Fig12-2

おわりに

形態的な変化に視点を置く石造物の研究は、中世石塔の成立過程や近世庚申塔の分野で試みられていますが、その他の近世～近代の石仏群についてはほとんどなされていません。もとより石造物研究は「金石学」の一分野として銘文の解析が第一義的であること、また像容に関してはその多くが仏像であり、仏像学の範囲で主尊の特定とその仏教的意義が説き明かされればよしとされてきたからだと思います。

今回私が取り組んだ子安像塔は、近世庶民信仰により創造された石造物です。石塔は一般に祭祀対象の石造物として宗教的な儀軌に従いますが、子安像塔はその制約は少なく、石工と依頼者の意向が反映しやすいため、独自の変化と型式的特徴による細分が可能な分野でした。また生産用具や生活必需品など機能性重視の遺物に比して、地域的な個性と分布が明らかでした。

子安像塔が創出され普及していく過程の江戸時代中期の分布を地図 (Fig.13) に表すと、印旛沼南東から利根川下流域に広がる特徴が顕著で、このような地域的な傾向は、弥生後期の付加状縄文を施した土器の分布や、「終末期古墳 (6世紀末～7世紀中葉) の箱式石棺Ⅱ型式の分布図」(石橋 1995) の様相にも類似しています。

江戸時代中期とそれ以降、現代までの既知の子安像塔約1千基については、その集成と分類整理を行ない、『房総の石仏』20～22号 (蔵 2010 2011 2012) に報告しましたが、同じく濃密な分布が予想される茨城県域はまだ調査していません。今後はこの地域も含めての調査研究が必要であると思っています。

註 1) 千葉県石造文化財調査団 1980『千葉県石造文化財調査報告』千葉県教育委員会 73頁

2) 千葉市教育委員会 1981『千葉市文化財調査報告第五集 路傍の石仏』93頁

3) 船橋市史編さん委員会 1984『船橋市の石造文化財 (市史資料)』船橋市 30頁

4) 榎本正三 1992『女人哀歎 - 利根川べりの女人信仰』崙書房 123頁

5) 平岩毅 1999「子安観音」『房総の石仏百選』房総石造文化財研究会 たけしま出版 68頁

6) 印西町教育委員会 1992『印西町石造物総集編「石との語り」』8頁

7) 我孫子市金石文編集委員会 1979『我孫子市史資料 金石文篇Ⅰ石造物』我孫子市教育委員会 95頁

8) 白井町教育委員会 1987『白井町石造物調査報告書 - 第二集 - 』76頁

参考文献 1) 石橋充 1995「常総における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学 先史学・考古学研究』第6号 41頁

2) 田中右品 1993「近世下野の子安像塔」『日本の石仏』第66号 日本石仏協会 6頁

3) 蔵由美 2010「北総の子安像塔の系譜＝江戸時代中期におけるその出現と成立について」『房総の石仏』第20号 房総石造文化財研究会 38～63頁

4) 蔵由美 2011「北総の子安像塔＝江戸時代後期 (文化～天保期) の展開について」『房総の石仏』第21号 房総石造文化財研究会 18～36頁

5) 蔵由美 2012「北総の子安像塔＝江戸時代末期から現代までの様相について」『房総の石仏』第22号 房総石造文化財研究会 46～66頁